

「極道！極道！」と頸を伸出して、口から泡を吹いて居る。

常松は片手に打たれた頭を撫でながら、寛りと船に寄り懸つて、凝と海面を眺めて居た。

離れた襯衣の袖は漸と糸に止つて垂下り、襟も肩も裂けて居た。其に汗に濡れた胸元は、日を受けて油でも零したやう穢く光つて見える。そして親父の意氣地無い態を見ては一種の快感を持つて居る。親父は餘程強い腕力家と思つて居たのに、案外にも脆く砂の上に尻腰ついて、然も無念さうに鐵拳を空に振つて分らぬ。

事を怒鳴つて居るのを見ると、強者が弱者に對する時の様に、一種妙な蔑みの微笑を漏さずに居られなかつた。

「畜生！不孝者！お天道様は何故那奴を殺して下さらねえ、親不孝め。」

其聲が皺喰れては居るが、餘り大きいので、常松は思はず不安さうに魚場の方を見た。恚麼不法な悪口が他に聞かれてはと思つたので、然し見えるものは唯濱に碎ける波と、和かな日の光ばかり、外に何も無いで、カッと唾を吐いて、

「饒舌れ！最つと大きな聲で饒舌れ！一體何が怨で、然う俺に喰つてかゝる御互ひの中に面白く無え事があるんなら、明様に然う言つたら可かんべえ、何も那樣に吠鳴らねえでも……」

「黙れ！最う主たあ親子の縁切るだ、極悪人め、早く何所へなり行つ了へ！」

「だけれんど、俺村さは行かねえぜ、此所で歳を越す氣だから。」

何所を吹く風と云つた調子で、故と憎さげに空嘯きながら、

「此所位好い處は餘所に無え、……お前が何と云つても俺あ知つてるだ、仕事は樂だし、自由は利く、……お前村に居る時分にや随分俺をこき使つたが、最う一人前の俺だ、一つ此所でやつて見るが可いだ！」

と親指で鼻先を押へて靜かに笑つた老爺はカツと逆上して飛び起きて、其所にある櫓を擱んで、

「畜生！其れが親を扱ふ爲方か、奴！殺して了ふだぞ。」
怒り猛つて船まで走付く息子は、最う遠く彼方に逃れて居た。そして其駈出す度に、襦衣の破れた袖が風に飄々して居る。

夢中になつて、老爺は櫓を後から投げつけたが、到底息子の所まで達きもしなかつた。疲れ切つて船の傍にドツカと坐り、口惜しさうに息を苛々させて居た所を又息子が遠くから聲をかけて、

「何だ其態は、耻かしい事あ無えか。お前は段々年寄つて来て、好い年をしてさ、其で女狂が好く出来たものだ、は、は、は、お臍が茶あ沸す……俺あ何うしても村さ歸んねえ、最う苦勞は澤山だべえに、お前歸んなせえよ、お前見たやうな老爺は此所に居たつて爲方が無えだ。」

「畜生！可い加減にさらせ」と叱り付ける老人の聲は

涙に顫へて居る。

「行け、何處いか行つ了へ、マゴクしてると打殺すぞ。」

けれど、常松は沈着振つて、片頬笑を洩らしながら其所を歩き出した。老爺は凄い目をして此れを見送つて居ると、段々其影が小さく、足許が砂に隠れて行く……旋て船の半分が見えなくなり、次は肩頭……最う全く見えなくなつた。然し、間も無く其所から少し距つた所に突然其頭が現はれ、次第々と身體が皆見えた。然し其は大層小さかつた。振返つて何か言ふやうでも聞える筈は無い。

「畜生！極道！」と老爺は叫び續けて居た。
遙かに妙な手真似をして、常松の姿は遂に砂の中に
没して了つた。

老爺は息子の姿を没した方に目を据ゑ、丸脊になつ
て手を砂に付いて凝と見て居たが詰上る不快に胸が
ムカ／＼して身體は痙攣けるやうにブル／＼顫へる。
で起きるには起上つたものゝ手足や體の節々が痛ん
で思はずヨロ／＼とよゝめいた。

細帯がずり上つて腋窩迄來て居たので、其れを直さ
うと思つたが、今更のやうに腹立紛れに砂の上に投付

けた。そして小屋を指して歸りかけたが、偶と途中に穴
のあいて居る窪を見付けて、自分の落ちた所は是だ、是
さへ無くば、那れ程意氣地ない耻も、受けなかつたらう
にと、今更らしく胸を沸す。

小屋の中は混雑して居た。老爺は其邊を諸所探して、
袋の中から焼酎の壺を取出し、やつとの事でキルクを
開けた。行成口に當合つて一息に呷つたが、齒に當つて、
酒は口髯に流れかゝつてダラ／＼と胸を濡した。然し
酒の味は水のやうに淡かつた。何も彼も喰違つて邊に
ある物が總て頭の上へ落ちて來るやうな氣がして、氣

分が重苦しくて、脊の痛みが劇しくなる。

「あゝ、俺も老ぼれた、老ぼれたな」と呻きながら、小屋の戸口の砂の上に身を投げた。其前には廣い海が遠く廣がり、一種活氣に充ちて、波が何時ものやうに騒々しく、楽しく興じ笑つて居る。老爺は此様を暫く見惚れて居たが、やがて我に歸つて、息子の不逞な辭を心の中に繰返して考へた。

「那の海がみんな肥えた黒土であつて、耕作が出来たらなあ」と言ふ。

先刻の伴の言葉と共に、鋭い衰弱した感が百姓の心

を刺戟して、我とわが胸を激しく小摩り長く嘆息を吐いた。頭を重く前に低れて、脊は大きな岩でも乗せて居るやう、苦しく咽がコビ付いてコン／＼と空咳を爲て、空を仰いで空しく寝て居る。

あゝ、猪之作は十五年以上も睦じく連添つた妻を、悪いくおせんのため忘れ果て、放蕩三昧に日を送つて居たのである。天罰と云ふものか、現在自分の實子に耻しめられて其を罰する事すら出来ないのだ。

子供は親に叛き、親の心を切々に裂いて了つた。何も彼も、皆那の小女郎の爲だと思ふにつけ、好い年をし

て若い娘と戯弄け散したとは……
 老爺は其所に坐つたまゝ長い間反省に耽つた、そして其頬を傳つて涙がバラ／＼と流れた。
 日は海に沈んで華やかな残照も薄らぎ夕風そよそよと吹いて憂き涙に咽ぶ老農夫の面を拂ふ悔恨の念に胸が一杯になつて凝として居たが遂に其所に睡落ちて夜明前まで寝て了つた。

十五

其事のあつた翌日常松は他の漁師と共に小蒸汽に引かれて沖漁に出掛けた其から四日ほど経て唯一人、

食糧を取りに漁場へ歸て来たが丁度晝頃なので他の労働者は晝飯を済して切りと無駄話して居る所であつた。
 恐ろしく蒸暑い日で濱地は焼けるやうに燃えて、魚の骨や木屑が酷しく足の裏を刺す常松は番小屋の方に行かうと思つたが素足なので如何にも耐えがたい、と云つて直ぐ小船を引返す氣も無いのは唯一目でもおせんに遇て行きたいからなので沖に居ても唯最う女の事ばかり心配で、仕事中でも其を思ふと氣が氣でない親父はおせんに其後遇つたらうか遇つて何うし

たらう、業を沸して打擲抛は爲まいか、縦し擲抛した所で大した事はあるまい、餘り鼻端の強過ぎる女ゆる、其が薬になつて少しは素直になるかも知れない、少女の折檻は却つて好い位のものである。

漁場の小屋は森として響も無い、長い粗末な木造の建物、戸障子を残らず開廣げて、この暑さに疲れ果てゝも居るやう、監督の家では嬰兒が泣く……積櫛の蔭ではヒソ／＼語らふ話聲が聞える。

常松は其方に志した——何でもおせんの声も混つて居るやうに思つたので、然し其傍まで來た時、渠の足

はハタと停つた、そして慧しげに目をそばめた、物影に俯向きに仆れ、兩手を頭の下に支つて話込んで居るのは例の烏彌太、其左と右に蹲つて居るのは、おせんと外に親爺の猪之作も居た、其にしても親爺は何うして漁場に來て居るのだらう、おせんが氣になつて番小屋の方を止したのだらうか、困つたものだ、國に居るお袋にこの態を見せたら何うだらうなぞと、色々の事を思ひ惑ふて居た。

「そんな譯なんだ」
疑ひも無く彌太の聲である。

「だから最う、お互に機嫌よく別れてさ、行くものは行くさ、歸つて土を掘らうと云ふのも結構だ。」

其を聞いた常松の顔には、言はれぬ喜の色が溢れた。「んぢや、俺行くべえよ。」と云ふのは猪之。

常松思切つて其所に飛出した。

「お早う！皆、奈何したね。」

猪之は一目見たぎり何とも云はずに面を外向けた。

おせんも無言。

彌太は足を蹴動しながら例の強い調子で以て「へッーまた孝行息子が歸つて御座つた。おい相談だが、お前の

面の皮を引剥いて太鼓にでも張つたら何うだ。」

おせんはクスリと笑ふ。

「暑いで無いかね。」と常松は皆の中へ割込んで座る。

猪之の作は苦い顔して「常よ、俺あ主を待兼ねて居た、會

所で聞いたら何でも今日は歸るちふ事だからな。」と云

ふ聲は掠れて元氣無く、顔付も妙に寂しい。

「俺あ飯米取りに歸つて来たぞ。」と言つて常松は彌太

に煙草を一本無心した。

「無え、お前のやうな頓痴奇にやる煙草は生憎持たね

え。」と白々しく當付ける。

老爺は砂を掘くりながら、「常よ、俺あ村さ歸る事に決めたよ」と言ふ。

「奈何して？」

「何でも無えが……まあ主は此所に残つて居るが可い。」

「んぢや、残るとも……二人で歸つたとて爲方が無えからねし。」

「本當だな、俺あ最う何も云はねえに決めた、主も餓兒ぢや無いもんだて、獨りで身心幕するが好いぞ、だがの、俺もはあ取る年だし、何うせ長い事あんめえでな……」

是から村に歸つた所で、百姓仕事は忘れたも同じ事だから、家の活計にも困るべえけど、まあ一生懸命に働いて見る意だ、主もなあ、家にお母のある事だけは忘れてくれんなや、の、常松」と言ふ。聲に心の苦しさが見え、聲も牙えず、口髭を撫で、居る指先はブルブル顫えて居る。おせんは目を据ゑて見て居た。烏彌太は片目を閉ぢて、片目で凝と常松の様子を窺つて居る。若者は嬉しくて、耐らないで、其喜びが偶もすると顔に出たがるので、黙つて俯向いて居た。

見てやつてくれせいよ。」

「分つてるだよ。」

「分つてりや其れで可い、俺は言ふだけ言つて置くだ、孝行するも爲ねえも、其れは主の勝手だからな。」

「冗いだな、父さんは。」

猪之作はホツと深い溜息を吐いた。暫くの間皆言葉が無い。

すると、おせんが行成、

「あ、最う仕事の初まる頃だよ。」

「んぢや、俺あ行くべえ。」

と猪之作老爺は立上がる外の三人も、皆立ち上つた。「ではな彌太よ、仙臺から三里ばかり増田の在だから、那地の方さ來たら是非廻つてくらせいよの。」

「あ、行くよ。」

と彌太も幾らか色を動かして、見窄らしい老人の顔容を眺めた。

「仙臺は好い町でな、奥州ぢや先づ名代の城下だよ、那處まで來りや俺の村は直ぐだで。」

「あ、一度は是非行つて見やうよ。」

「お別れだでの。」

「丈夫で行かつせ、なあ老爺。」

「んぢや、左様なら、おせんさあ。」と顔を見ないやうに俯向きながら低い聲。

おせんも幾らか誘はれ氣味で、氣毒さうに別れを惜んで居る。常松は其を見て笑を隠して他見する。

烏彌太は突立つて、大きな欠伸を一つ。

「あゝ、この天氣ぢや歩くと熱いよ。」

「左様なら皆の衆彌太！左様なら。」

顔を見合せて四人暫く言葉が無い。

「左様なら。」左様なら。」と悲しげに繰返す。元氣のない悲

しげな聲を聞くにつけ、常松も何となく優しい、浦悲しい心持が湧起る。可哀さう思はれてならぬ。然し何う言つたものか、何と云つて此情を傳へて可いものか。それに今更ら何となく氣耻しいやうな氣がして成らない。且つ此前岬で喧嘩した事や、今のおせんの事なども想ひ浮べる。

「お袋の居る事、忘れるでねえよ。」と老爺はソロ／＼歩

き出す。
「あゝよ。」と幾らか物柔かに「心配は要らねえだ、忘れやしねえから。」

「そんなぢやの、運えん好よく暮くせよ、必かならず俺おれが事ことで氣き悪わるくしてくれんなよ、其そのになあ彌や太た、煮に釜かまは青あお船ぶねの傍そばの砂すな中に埋うめて置おいたべからな。」

「釜かまなんぞ何なんにするだよ。」と常つね松まつは不ふ審しんさうに問とふ。
「んにや、今いま度ど彌や太たが俺おれに代かつて番ばん小こ屋やに棲すむ事ことになつたでな。」

常つね松まつは嫉ねたしさうな目め付つで、彌や太たとおせんの顔かほを見み較くらべた。そして其その喜よろこびを隠かくす爲ために頭かぶを俛ひれた。

「さいなら、俺おれあ最もう行いくだ。」
とトボく出で掛かける後あとから、おせんも隨したがいて行いき、

「それでは私わたしも其その邊へまで送おくつて上あげやう。」
彌や太たは飛と上あらんばかりに驚おどいて、行い成なおせんの袂たもとを摺すみ、

「待まちて、何なん所ところへ行いくんた。」

「お放はなしよ煩わづさい。」

「まあ用もちがある、坐まれ。」と彌や太たは鋭とい。

「まあ何なん故ゆ……又何またを詰つらない真ま似にするのさ。」

「詰つらな無ない、まあ坐まれ。」

常つね松まつは齒はを喰く緊きつて、爲し方かた無なく云いふが儘ままになる。

「何なんの用もちだかね。」

「喧しい、黙つて居ろ、今聞してやら。」とジロく若者を
睨め廻す常松は爲方無いと諦めた様子。

おせんと猪之老爺とは無言で暫く歩いて居た老爺
は暗然と頸を垂れ、歩調は疲れた人のやうに重い。

「猪之さん！」

「何だよ。」

老爺は些いとおせんを見たが、直ぐ目を外らして下
ふ。

「お前さんと常さんと喧嘩爲したのは私だよ、仕組ん
で爲た芝居だよ、ホントに氣の毒な事爲たわね、折角仲

好くして居た所をさ。」

「何で那樣事爲たゞい。」

おせんは些と肩を窄めて、娜やかな笑を洩したゞけ、
何とも言はない。

「然し何も藝の無い事でねえか、詰らない。」と苦い顔。

おせんは無言。

「主は伴を俺と縁切らすべえ爲めだ、な腐れ女端め、爲
るに事欠いて何たる事する、主あ耻しく無えか、悪いた
思はねえか。」

「私は何とも思はない。」

老爺の聳は憤怒と絶望とに激せられて、恐しく頭えて居る。何とも思はねえ？これ、何とも思はねえと云つたな。」

老爺は女の取濟して居るのが憎々しくて耐らない、行成躍りかゝり引倒して、砂に踏躪つて、散々に蹴たり打つたりしてやらうかと思つた。で、拳を固めて邊を見回したが、常松と彌太とが凝と此方を見詰めて居るので、烈しい聲で、

「勝手にしろ、全體なら許してやる奴ぢや無えけど。」と然も忌々しさうに云ふ。眼は血走り、拳はワナ／＼主の

やうな不貞な女婦は生きてるもな無え、死ね／＼、死んで了へ。」

おせんは笑ひながら聞いて居たが、旋て

「では爰でお別れよ、左様なら。」

と小腰を屈めて、チヨコ／＼走りに駈戻つて來た。

(完)

強
き
戀
終

明治四十一年十一月十五日印刷
同 四十一年十一月十八日發行

實價金七十錢

強き戀

版權
所有

著作者 小栗磯夫

發行者 和田靜子

印刷者 岡功

發行所 春陽堂

印刷所 株式會社 國光社

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

(電話本區五六一七)

東京市日本橋區通四丁目角

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

東京市日本橋區通四丁目五番地

著 述 目 録

故尾崎紅葉氏原著

脚本
金 色 夜 叉

實假參拾錢◎郵稅四錢

坎坷なる貫一が運命を解せんと欲する者、多恨なるお宮の生涯を知らんと思ふ者、須らく此の『脚本金色夜叉』を讀め、紅葉先生が生前の腹案に據つて、先生の高弟たる氏が『金色夜叉』の結尾を全うせしもの、然かも文壇の絶品たる紅葉先生が小説の對話は、氏が作劇の技術と相待つて、妙を極む。(六版)

著述目錄

筒井年峰氏書

名物男

實價參拾錢◎郵稅四錢

徳川の流れば澄める延享寛延の昔、
尾州名古屋の大達者放れ駒大八とて
御三家の筆頭六十五萬石の城下に俠
名並ぶものなかりし名物男、雪の如
き其意氣地と、花の如き生涯とは氏
が嘗て年少の活氣火の如き筆を以て
描き出さる。讀むべし、讀むべし、
奇趣豪放の名物男。(再版)

小栗風葉氏

意匠コロタロイ口繪

黒装束

實價四拾錢◎郵稅六錢

あの聲で斷腸食ふか時鳥類といふあり。人は唯
其麗色を知つて未だ温情の玉の如きを知らず、
却つて貪慾なる父が世に毒さし惡業は彼が機弱
なる身にゆくりなき奇禍を及ぼして、狂風一夜
花は長へに凋みぬ。嗚呼昭君の怨、ヘレンの恨、
佳人は遂に薄命を免れざるべきか、涙に生れ涙
に生き、涙に死せし彼が悲しく怪しき運命を世
の哀れを知る士女と共に叩せん哉。(再版)

著述目錄

口繪活人畫
表紙カシヤミ

女學生 新作

實價七拾五錢◎郵稅六錢

當世女學生の生活状態は茲に氏特得の辣手に依つて直寫せらる精細透徹の氏が著筆は敢て俗世間に迎合せんとにはあらず一面に於ては明治風俗史の材料として一面には世の父兄が参考の資たらしめむが爲のみ。

小栗風葉氏

小栗風葉著
青春

世には戀愛を耽き戀愛を描くもの多し、而かも戀愛の眞意義と眞價值とを知らんと欲する者は、須らく此の篇を讀め、高遠の理を幽婉の情に托し、清新の想を遺るに豈麗の文を以てす、著者蘊蓄の餘心を茲に傾倒して才華煥發!

梶田半古氏裝畫
梶田半古氏裝畫
春の卷 六版 實價八拾錢 郵稅拾錢
夏の卷 五版 實價八拾錢 郵稅拾錢
秋の卷 再版 實價八十錢 郵稅十錢

著述目録

水野年方氏畫

戀慕流

定價四拾錢◎郵稅六錢

尺八の妙手として聞えたる一青年の薄命なる女
グイオリストと相逢うて暫く戀の樂しき調を合
すほどもなく憂き世の嵐は忽ち其妙音を亂して
管聲漸く月に枯れ琴線塵は雨に断たんとす、戀
軻の士淪落の女詰共に風塵中に落つる傍女主人
公の老親と幼妹とありて東西に流離し又更に人
世一部の哀を盡し來る。戀慕ながしとは主人公
が戀と望とを失ひてうつし世の巷に彷徨ひつゝ
吹奏せる悽婉の悲曲なり。(五版)

小栗風葉氏

梶田半古氏畫

中心くらべ

定價四拾錢◎郵稅六錢

星の敷ほど男はあれど、月
と見るのは主一人に、花の
やうなる美しき令嬢と、雪
のやうなる潔よき藝妓と
が、實と情の心中くらべ、明
治丹公一代の艶福收めて
此篇にあり。(再版)

小栗風葉氏

武内桂舟氏書

地下らつか

實價四拾錢◎郵稅六錢

氏の著すところ清風異香を吹くの趣あり。菰郁衣袂を拂うて、籬外の竹影娑婆として人を椰楡するが如し。浴後の美人あり、眉目清秀にして風丰妖艶楚々として人に迫る、一笑傾國の美噴々として天下に鳴るもの、これ本篇の主人公なり（再版）

257
768

